

バジャウ人アイデンティティ研究の「越境」に向けて

第4回国際バジャウ/サマ社会研究会議

山本博之

2004年7月21～23日、サバ州コタキナバルで国際バジャウ/サマ社会研究会議(ICBC)が開催された。これは、バジャウ/サマ人に関係の深い地域で開催されている同会議の第4回にあたる。今回はサバ大学キャンパスにおいて、サバ大学(UMS)、サバ・バジャウ文芸協会(PSBB)、サバ州立博物館の共催で実施された。

バジャウ人研究で知られるクリフォード・セイザー(ヘルシンキ大)が、自身がバジャウ人研究を始めた40年前から現在に至るバジャウ人研究の発展を総括し、その延長上にあるこの会議に大いに期待すると締めくくった基調講演に始まり、サバ内外から集まった参加者によって3日間で25の報告が行われた。また、会議日程が終了した翌24日にはサバ州立博物館で「サバのバジャウ文化」特別展の除幕式が開催され、さらに翌25日には毎週日曜日に行われているコタ・ブルのタムー(定期市)への小旅行が企画された。

セッション会場が複数に分かれていたことに加え、ペーパーが配られなかった報告も多いため、以下では筆者の印象に残ったいくつかのセッションのみ取り上げることをお断りしておきたい。

*

この会議全体を通じて印象に残ったのは、第一に、サバ側の参加者に関して研究者の所属と研究内容にはっきりした対応関係が見られたことであった。また、バジャウ人を研究対象とする以

上、国境(あるいは州境)による区切りにとらわれないという態度が強調されるかと思っていたところ、一方でサバのバジャウ人が現在置かれている社会経済状況を調査した報告が、他方でサバ以外の地域におけるバジャウ人コミュニティやフィリピン人・海上民に関する報告が行われ、両者の間がかなりはっきりと区切られて扱われていたことも印象的であった。これは、特に(サバを含む)マレーシア側の参加者に顕著に見られる態度だった。

サバのバジャウ人を扱った報告は、ほとんどがサバ大学(UMS)の若いスタッフたちや、それとマレーシア国民大学(UKM)のスタッフが組んだチームによって行われたもので¹、サバのバジャウ人が社会経済的に低い水準におかれていることを実証するものだった。これは、半島部からサバ大学に出向してきたマレー人研究者が地元出

¹ James M. Alin, Susan Andin, Mori Kogid, Roslinah Mahmud(いずれもUMS)の「The Individual Labor Supply of the Bajau-Sama Elderly in Selected Areas of Sabah」、Ramli Dollah(UMS)の「Peranan Pendidikan dalam Pembangunan Masyarakat Bajau Daerah Semporna」、Kasim Mansur、Mohd. Safri Saiman、Sidah Idris、Rozilee Asid(いずれもUMS)の「Tahap Kesedaran Zakat di kalangan Suku Kamu Sama-Bajau」、Gusni Saat(UKM)とKasim Mansur(UMS)の「Socio-Ekonomi Sama-Bajau dalam Transisi: Perubahan Makro dan Implikasi Mikro」など。

身の若手スタッフを使って調査を行いながら研究方法などを教授し、同時にブミプトラの一員であるバジャウ人の社会経済的地位の向上に寄与する研究を進めていると理解できる。ただし、その一方で、半島部でマレー人の経済水準が上がり、ブミプトラ政策の継続に対する疑問の声が出ていることとあわせて考えるならば、ブミプトラ政策を継続する理由としてサバのブミプトラが、とりわけムスリムであるバジャウ人が、半島出身のマレー人研究者たちによって「貧しいブミプトラ」として「発見」されたとする見方もできるだろう。

サバ以外の地域を対象とした報告は、いずれもフィリピンやタイなど近隣地域出身を含めたマレーシア国外から来た研究者によるものだった²。その中では、クアラルンプールやスランゴール州など半島部マレーシア各地に在住するフィリピン人の調査を行ったリンダの報告が興味深かった。リンダによれば、半島部のフィリピン人コミュニティではムスリム・非ムスリムの区別なく「フィリピン人」として相互扶助を行う枠組が形作られつつあるが、そのような中であってサバを経由して半島

部入りしたフィリピン人は、正規の方法でマレーシアに入国していない可能性が高いとして、半島部在住のフィリピン人コミュニティから「サバハン」と呼ばれて区別されているという。なお、「サバハン」と呼ばれているフィリピン人の内部ではムスリムとクリスチャンで分かれており、「サバハン」なる集合アイデンティティを共有する様子は見られないという。

バジャウ人アイデンティティ形成の歴史的側面を扱った報告としては、1950年代半ばのフィリピンで、タウスグ人による支配に抵抗し、自らを解放するシンボルとして「バジャウ」を選ぶという映画『Badjao』が作られたことの意義を論じた報告が、映画『Badjao』の上映とあわせて行われた。同じ時期にサバでマレー人優位から自らを解放しようとする動きが生じ、そのシンボルとして自らを「バジャウ」と名乗るべきだとの主張がマレー語出版物を通じてなされたと報告した筆者にとって興味深いセッションとなった³。

*

このほかに、バジャウ人の伝統文化や言語に関する報告もあった。伝統文化に関する報告は、主にサバ州立博物館のスタッフによって行われたもので、伝統文化のあり方を記述し、その保存を訴えたものや、伝統文化の現代における発展

² Linda A. Lumayag-Too (UPM) の「Negotiating a World without Borders: Narratives of Powerlessness and Resistance of Filipino Migrants in Malaysia」、Nik Abdul Rakib Haji Nik Hassan (パタニ在住) の「“Chao Lay” atau Orang Laut Selatan Thailand」、Nimfa L. Bracamonte (ミンダナオ州立大学) の「Evolving a Development Framework for the Sama Dilaut in an Urban Center in Southern Philippines」、Wilfredo Magno Torres III (Asia Foundation) の「Kalluman Ma Tahik: Household Strategies, Gender, and Sea Tenure in a Sama Dilaut (Bajau) Community in Kabuukan Island, Sulu」など。

³ フィリピンのバジャウ人は Aileen Toohey (シンガポール国立大学) による「Nationalism, Memory and Film: The Significance of the Film *Badjao* in Philippine Cinema」、サバのバジャウ人は Yamamoto Hiroyuki による「Malay Periodicals in North Borneo as the Ideological Background to the Emergence of Bajau Identity」。

を唱えたものがあった⁴。儀礼などで演奏される音楽の楽器と旋律を題材に、バジャウ人とドゥスン人の生活圏が交わる場として知られるコタ・ブルにおいて、バジャウ文化とドゥスン文化が交じり合い、新しい様式の萌芽が見られるとの興味深い報告もなされた⁵。また、主にサバ外から来た言語学者によってバジャウ語に関する報告もいくつか行われた⁶。

*

バジャウ語といえば、サバ・バジャウ文芸協会事務局長のサイド・ヒナヤットが何年もかけて編纂していたバジャウ語辞書がついに完成し、そ

⁴ 伝統文化の保存を訴えたものに、Ismail Hj. Ibrahim (UMS) による「Motif Ukiran Bajau: Satu Kupusan Awal Motif dan Bentuk Ukiran Sarung dan Hulu Guk alias Lading Kota Belud」があった。民族文化の発展や利用を唱えたものに、Joseph Pounis Guntavid と Janis Galaip (いずれもサバ州立博物館) による「Ethnobotany of the Bajaus of Semporna, Kota Belud and Menggatal」、Patricia Regis (サバ州観光文化環境省)、Hanafi Hussin、Judeth John Baptist (サバ州立博物館) による「Art and Identity in the Bajau Material Culture of Sabah」などがあった。

⁵ Jacqueline Pugh-Kitingan (サバ大学)、Hanafi Hussin、Judeth John Baptist (サバ州立博物館) による「Acculturation at Kota Belud Revisited: Iranun and Bajau Influences on the Gong Ensemble Music of the Tindal Dusun」。

⁶ Mark Miller (テキサス大) による「Considerations for a West Coast Bajau Orthography」、Saidatul Nornis Hj. Mahali (UMS) による「The Interpretation of Our Own People: An Anthropological Linguistic Aspect of the Bajau Kota Belud Sair Genre」、David Mead (SIL International) と Myung-young Lee (SIL International) による「Location of Bajau Communities in Sulawesi」など。

の披露がこの会議初日のレセプションで行われた。このレセプションは、元サバ州首相のサレー・サイド・ケルアクがサバ・バジャウ文芸協会会長として会議参加者を招待したもので、会議参加者の1人マーク・ミラーによる絵入りの西海岸バジャウ語・マレー語・英語辞書⁷、そしてサイド・ヒナヤットによるバジャウ諸語・マレー語辞書⁸が紹介された。サイド・ヒナヤットのバジャウ語辞書は辞書部分だけで320ページに及び、サバの東海岸・西海岸など各地で使われているバジャウ諸語の単語が収められているほか、前書き部分には綴りの法則などもまとめられており、バジャウ社会研究者に欠かせないものとなる。労作を完成させたサイド・ヒナヤットに謹んで敬服の念を表したい。また、バジャウ人自身によるバジャウ語辞書の編纂・出版を実現したサバ・バジャウ文芸協会に対しても拍手を送りたい。

ところでこのレセプションでは、食後の余興にサイド・ヒナヤットが舞台上上がって歌い始め、それに続いてレセプション参加者が順に指名されて壇上で美声を披露するという一幕があった。その場にいた事情通によれば、壇上に呼ばれた人々はサバの政府・文化・社会の各分野で活躍する「有名人」たちで、その多くはかつて中学・高校時代に一緒に歌ったりスポーツをしたりした同

⁷ Mark T. Miller. 2004. *Kamus Been Gambar/ Kamus Bergambar/ Picture Dictionary, Bajau Pantai Barat, Bahasa Malaysia, English*. Kota Kinabalu: PSBB.

⁸ Mohamad Said Hinayat. 2003. *Glosari bahasa Bajau/Sama – Bahasa Melayu*. Kota Kinabalu: PSBB.

窓生仲間であり、それぞれ学生時代からの「持ち歌」を歌ったとのことだった。民族性も宗教も異なる人々がこのようなサークルを作り、それがさまざまな分野に分かれて今のサバ社会を支えていることも興味深いが、バジャウ研究会議のレセプションでありながら、サバ・バジャウ文芸協会の事務局長であるサイド・ヒナヤットをはじめとして誰一人バジャウ語の歌を歌う人がなく、みなマレー語と英語の歌を1曲ずつ歌っていたこともまた興味深く思われた。

*

会議で報告されたペーパーの内容もさることながら、サバ出身の会議参加者の顔ぶれも興味深いものであった。サバ出身の報告者の何人かは、自身の報告に先立って、なぜ自分が「バジャウノサマ・コミュニティ」を掲げるこの会議に参加し、報告しているのかを説明した。一例を挙げれば、「私の祖母はバジャウ人で、私も祖母から習ったのでバジャウ語を少し話すことができる、だから私には今日この場で話す資格があるのだ」という調子だ。この人物は、私が数年前サバに住んでいたところに参加したいいくつかの会議でしばしば見かけ、そこで学校教育にカダザン語を取り入れることの重要性を「カダザン人の立場」から熱く語っていた人物だった。

別の報告者のサイダトゥル・ノルニスは、父親がバジャウ人、母親が華人で、まわりに誰がいるかによってマレー語と華語を切り替えて使っていた。ノルニスの場合には父親がバジャウ人なのでムスリム名しか持たないが、両親の民族性が逆になると、ムスリムとしてムスリム名を持ちながら、父親

から受け継いだ華人名も持つことになる。この会議で外国人参加者の送迎を担当してくれた Lai Che Chung@Abd. Latif は、あるときはアブドゥル・ラティフと、またあるときはライ・チーチュンと呼ばれ、一見すると民族性がまるで異なる二重の名乗りが公然となされている人物であった。

バジャウ人は、複数の国家にまたがって分布し、それぞれの地域で置かれた立場が異なり、しかも相互の行き来が多いことから、移動性の高さ、それにとまなうアイデンティティの変化が人々の注目を集めてきた。バジャウ人は、アイデンティティの「いかがわしさ」を主張する事例として好都合な人々であると言うこともできるだろう。しかし、マレー語を話し、イスラム教徒であるサバのバジャウ人が、マレー人ムスリムが優位の社会でマレー人を名乗ることは、バジャウ人に限らず広く見られることではないだろうか。これは、それを「バジャウ人」と呼ぶかどうかはおくとして、あるひとくくりの人々がいて、その人々がアイデンティティを変化させるという議論であり、これは「アイデンティティのいかがわしさ」論の限界を超えていないだけでなく、現実の「バジャウ人」の多様なあり方にも即していない議論ではないだろうか。民族アイデンティティがバジャウ人とカダザンノドゥスン人、あるいはバジャウ人と華人の間でも相互に行き来可能になっていることを踏まえつつ、その一方で「バジャウ人」という確固たるアイデンティティがあるとの主張もあることも含めて説明する方向でアイデンティティ研究の限界を越えていくことが今後の課題となるだろう。